

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 4 月 15 日現在

機関番号：17201

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24652075

研究課題名(和文) <文化地霊学>からの挑戦—免疫・タブー・徴候/周縁の<マーキング作用>の解明

研究課題名(英文) A Challenge from "the Cultural Studies of Genius Loci": Immunity, Taboo, and symptom/ Marking Action on Borderline

研究代表者

木原 誠 (Makoto, Kihara)

佐賀大学・文化教育学部・教授

研究者番号：00295031

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、医学・精神病理学の三つの概念、免疫・タブー・徴候に共通する現象、境界/周縁で起るマーキング作用に着目し、これを地霊に宿る文化の深層記憶(文化免疫作用)による主体的印づけ=各文化を区分するタブー(印づけ)の痕跡と同時に徴候(歴史の予兆としての死の記憶)と措定した上で、そのメカニズムを解明することにより、死(者)の詩学の視座から政治・社会学に偏重される今日の文化学を逆説・異化する新しい学の一モデルを示すこと。対象地域は周縁のしるしづけ作用が今も活発に働き、比較精神史上重要な東西二地域 1 極西アイルランドの国土を二分する煉獄巡礼地帯、2 極東・東国の境界・鎌倉七口切通し一帯。

研究成果の概要(英文)：The purpose of my study was to show a new idea on culture from the perspective of the poetics of "genius loci" on the hypothesis of community as a cultural body keeping its own identity through the marking effect intrinsic in marginal place as cultural immunity the effect of collective memory to the dead, the sacrificed person(or ethnic trauma of breaking taboo). The key is to be found in the cultural functions of asylum, the same etymological meaning of immunity antonym of community. As each representative of Orient and Occident, the two area were elected; the subject area of the East(or Orient) was focused on Toukeiji in Kamakura, the earliest refuge of monastery(asylum) in Japan and the West on Lough Darg' s cloister(known as the birth place of purgatorial myth) in Donegal Ireland, the representative of Occident(the most western point of Europe) .

研究分野：アイルランド文化

キーワード：免疫のしるし 記憶と徴候 供犠 無縁 アジール 異化 ゲニウス・ロキ マーキング作用

1. 1. 研究開始当初の背景

文化が均質化され境界が溶けていく時代、これを象徴する一つの現象は死後の世界の無効性とそれに伴う生/死を分かち境界の消滅である。マレピトが訪れ、死者(地霊)の面影が影法師となり深い陰影を帯びた文化の奥行きは今や消滅の危機にある。だが皮肉にもこの現象は(「影をなくした男」が影の消失に自己性の消失を見たように)、文化の主体が実体を縁取る陰影=周縁に宿り、その主体の核心に死者の面影(文化の深層記憶)があることを告げている。生/死に可視的境界線を設け文節化する古びた世界観への眼差しが、文化・社会現象を解く有効な方法として境界論等で注目を集める学術的背景もここに求められる。ただこれらの研究に欠けているものは、文化記憶を歴史の遺産として捉えるだけでなく、それを徴候と読む未来の視座である。その点でギンズブルグ、中井久夫、田中純らが掲げる演繹・帰納に代わる第三の知=「徴候知」の視座、特に田中の研究、地霊が宿す文化記憶に都市の徴候を読む視点は注目に値する(『都市の詩学』)。本研究はこのような徴候知を、すでに筆者が科研費研究(挑戦的萌芽研究:<文化免疫学>からの挑戦)で得た成果=文化免疫学に導入することにより理論化し、一つの学の方法にまで高めるべきであると考へた。地霊と免疫、二つの異なる観点を繋ぐものとして、フロイトのタブーを記憶(トラウマ)論から徴候論へと一歩踏み込んだ知見、『夢と実存』(ピンズワンガー/フーコー)に見える命題「死へと向かう夢の想像力は過去のトラウマの復元であるまえに歴史の予兆である」に注目することにした。

2. 研究の目的

生物学的には身体コミュニティの主体の在処は脳ではなく免疫(インムニティ)にある。身体全体の記憶を宿すことで自己と非自己を識別する作用は免疫にあるからだ。身体臓器から無縁である免疫「(臓器機能の)役を免れた(=排除)」身体の内/外の境界・周縁を巡る身体の漂泊者が、身体コミュニティ(原義は「役/疫の共有」)の主体であるという逆説は、脳医学を頂点とする「臓器(パーツ・機能)主義」=近代医学に革命をもたらした。この原理が文化の免疫作用(「無縁の原理」)にも当てはまることは、前回の科研費研究(「文化免疫学からの挑戦」)を通じ検証済みのものであった。本研究はそこで得た知見をもとに一つの命題「身体・心理・文化の主体は周縁に宿り、周縁に主体の印/徴を残すしづけ作用が起る」を立て、研究範囲内で命題の検証及びそのメカニズムの解明を試みることを第一義的な目的とした。具体的には以下の仮説を検証・解明することを主な目的とした。

1) 免疫の矛盾原理としるし: 文化免疫は異文化を排除することで自己性を保つ一方、異文化を接種し抗体を作ることで絶えず自己

を変容・生成していかなければ、(免疫は自己に無反応であるため)免疫不活性が起こり、「自己免疫(自己攻撃)」により自文化を消滅させるという矛盾した作用をもつ。そのため「日常=ケ」は儀式=統御された暴力により定期的に「異常=ハレ」を取り入れ自己を異化し変容させることになる。その際、異文化接種により変容を被った文化は抗体形成の印を残すと措定される。

2) タブーとしるし: 異文化接種の印は、文化と自然、文化の内/外、生/死の境界=周縁に特徴的に見られるが、印は文化の周縁(アジュール)を放浪する無縁者=文化媒体者が身に帯びる異形の印に具現化される。彼らもつ印(柳田国男「一つ目小僧伝説」、ギンズブルグ「跛足伝説」はその例)はスケープゴート=人身御供 自然に対する暴力である文化的営為の代償の名残であり、この印が聖痕(依代)となり彼らは生/死を往来し、地霊の記憶の伝達者かつ未来を予告する徴候者となる(死者の記憶の徴候化)。こうして彼らはその身に死の記憶/徴候を帯びると同時に供犠の象徴となっていく。このことで文化の深層に刻印(トラウマ化)=タブー化され、こうして各文化は差異化され自己を形成・保全・生成していくと措定される。

3. 研究の方法

本研究では医学・精神病理学の三つの概念、免疫学・タブー・徴候と詩学あるいは表象学との隣接線=しるしづけ作用に注視することで、科学と人文学の知を融合する新しい方法を創成することを試みた。その方法の前提には周縁の原理としての以下の命題を措定することにした。

命題: 身体コミュニティ、人間の心理、文化コミュニティの主体は周縁に宿り、その際主体はしるしづけを行う。そのしるしは<記憶=記>であるとともに<徴>である(周縁のしるしづけ作用)。身体コミュニティのしるしづけ作用に関しては、免疫作用から検証可能であり、文化コミュニティに関しては<文化免疫作用=無縁の原理>により検証可能である。人間の心理に関しては、フロイト派のタブー原理により検証可能である。自己性の核心は自己の負性=タブーであるから、人は自己性の核心をこそ隠蔽・排除・周縁化する。だが同時にタブーは自己性の核心であるために、人はそれを隠しつつも開示し、密かにしるしづけを行なうことで自己性を保とうとする。文化コミュニティと心理におけるしるしづけ作用が平行するという仮説については、すでにフロイトが『トーテムとタブー』において検証を行なっているが、それを死の逆説の方から捉え直そうとしたのがピンズワンガーである。以上の前提にもとづき、本研究は科学と人文学を融合する新しい方法を考案した。

方法のモデル: 方法のモデルとして目下想定している先行研究は、科学の分野においては多田富雄が提示する免疫学研究の成果に

基づく新しい医学の観点、中井久夫が精神病理学の立場から提唱する「徴候の知」の観点、ピンズワンガーが精神分析学において展開する実存的夢分析の観点等である。他方、人文学においては、網野善彦、阿部謹也、石井進等に見られるアジュールの視点、山口昌男の周縁＝両義性の視座、波平恵美子、赤坂憲雄、宮田登の民俗(族)学におけるケガレ・境界の視座、カルロ・ギンズブルクにみられる歴史と形態(神話)学を統合する徴候知の知見、思想家 J・デリダの後期における「アントロギー(憑依論)」の知見等である。本研究は、上述した先行研究のさらなる読み込み、分析等を通じて、それらを融合させた新しい方法を考案し、その適用範囲を東西二つの対象地域に求め考察を深めていった。なお、これらの対象地域はすでに挑戦的萌芽研究と重複(ドニゴール・ロココダグと鎌倉・東慶寺)するところがあるが、今回はその調査範囲を拡大し、前回の対象地域に関してもさらに細かい分析・調査を行なった。

4. 研究成果

今日の文化学の暗黙の前提は、人間の生の営為を特徴づける文化作用の問題を生者の視点、すなわち生を生によって解釈可能とする同語反復(誤謬)の命題に求められる。サイドに代表される「地政学(オリエンタリズム批評)」はその代表的一例である。そこで顕在化されたものは「パノプティコン(権力中枢機構)」による絶対的文化支配の構図であり、否定されたものは皮肉にも彼が擁護する権力構造内で排除・周縁化された者たちの主体的な働きである(「沈黙する絶対的な他者存在」=歴史的無力性の肯定)。これはいかにもアポリア(袋小路)であるが、その原因の根本には文化作用と政治・社会作用の混同がある。この点については、前回の科研費研究で検証済みである。解明点は、文化作用が政治・社会作用と異なる原理=文化免疫(文化記憶)作用を有し、その原理の主体が権力機構によりコミュニティ内から排除・周縁化された「無縁者(インコミュニティ)」にあるという逆説である(「無縁/周縁の原理」というものであった。ただし、今回の研究はこの逆説を死の視点から捉え直すものであった。生者にとって最大の周縁=「沈黙する絶対的な他者存在」とは死(者)であり、死は生を映す唯一の<逆説の鏡>にはかならないからである(自己の瞳に映らないものが自己の瞳であるように、生者に映らないものはまさに生である)。この理解のもとに J.デリダは、生者中心主義の認識法=「アントロギー(存在論)」に対し「アントロギー(憑依論)」の逆説を提示している(『マルクスの亡霊たち』)。とはいえ、文化作用の解明にとって彼の憑依論は問題提起にすぎない。解明の鍵はピンズワンガー/フーコー(『夢と実存』)による独自の見解に求められた。彼らは夢の主体を自我ではなく夢それ自体であると指定した上で、夢の本質は死(実存)へと向かう想像力であり、死の夢はトラウマ

としての記憶であるまえに歴史の予兆であると解いているからである(死は生発生の根源的記憶であると同時に己の未来である)。夢に関するこの知見は本研究の命題と重なるものであった。すなわち、夢/文化の主体性、死の逆説、徴候化される夢/文化という観点である。この際の注目点は「死の夢は垂直降下運動のイメージに現れる」に求めた。垂直運動を生・死を分かち境界に垂直に置かれる依代=印/徴候と解し、そこに死の夢(記憶)の通訳=媒体者の存在を認めれば、しるしづけ作用解明の重要な鍵となると考えたからである。調査対象地域は1アイルランド国境地帯2・鎌倉七口切通し一帯に絞った。選択理由および研究成果は以下の通りである。

1) 西洋は「ヨーロッパ」というハレの名前の裏に「オクシデント」=「日没/没落=西」という影の名を隠し持っている。この名は生の表象「オリエント」(日の出=東)に対し死の表象であるためヨーロッパはオリエントから表象奪取を企むことになる「今日は西から昇り東に沈むことになった」(教父クレメンス)。他方、負の表象を帯びたこの名を極西アイルランドの極西・ドニゴールの洞窟(ロココ・ダグ)に封印し、その地帯を生前の罪を贖う「煉獄」と印づけることで自己の名を隠蔽・タブー化する。だが、その隠蔽はきわめて独自のものがある。「オクシデント」としてのヨーロッパの表象は、旋回する独楽のように己の主体を<隠しつつ開示する>という方法を取っているからである。かくして煉獄の印はカトリック(煉獄公認)にとって逆説的聖の表象となる一方、プロテスタント(煉獄否認)にとって悪の表象となった。この精神史の印はそのまま国土を二分する紛争の種/徴=国境となるが、詩人シェイマス・ヒーニー(アイルランドでは伝統的に詩人を呪術者/琵琶法師的者と見なす)は『ステーション・アイルランド』において、この境界の印にヨーロッパの記憶=主体を宿す文化の根源的な<印と徴>として捉えている。また、文化人類学者ヴィクター・ターナーは『キリスト教文化における巡礼のイメージ』において、国境と新旧教の思考を二分するこの印のなかに逆説的に文化の根源的な作用が今なお働く根拠として捉えている。興味深いことに、『ハムレット』のなかに、彼らの理解はすでに徴候として記されていた。シェイクスピアはその徴候を、<踏み絵・だまし絵・透かし絵>という彼一流の方法を用いて密かに提示していたことが確認された。というのも、ハムレットの第四の独白、「Xは存在するか否か、それが問題である」における存在Xとは父の幽霊であり、そこに暗示されているのはダグ湖の「聖パトリックの煉獄の穴」であったからである。詩人 W. B. イェイツは『ハムレット』のなかに密かに埋め込まれたこの暗号(徴候)を彼一流の「仮面」の方法を用いて解読することで、アイルランドがヨーロッパに果たした意味をそこに見出すことに

なった。すなわち、彼はアイルランドがヨーロッパ文化に与えた潜在的(象徴的)影響の核心に聖パトリックの煉獄をみたのである。

2)「東国」の境界に位置する鎌倉は、古都風情の裏に異界との境界の印が生々しく露出する「もうひとつの鎌倉」を隠しもっている。その印は七口切通付近に集中する「やぐら」(横穴式墳墓)に安置される無縁仏に象徴される。前を海、背後を丘陵で囲まれた「城塞都市」鎌倉は、七つの切通によって切り結ばれ、敵方はそこで待ち受ける剣の前に散り、捕えられた者は無縁者や遊女で賑わう市が立つ「化粧坂」(切通)付近で処刑された(刑場は「地獄谷」付近に集中)。その多くは東国転覆を目論む西方(平氏)の流れを汲む者たちであった(源氏と平氏=東西対立の背後に我国独自の東西感覚のしるし)。怨霊と化した戦没者の霊を鎮め結界を引くために多くの寺院が立てられ鎌倉仏教の振興を促した。その際、死者の沈黙の記憶を声にする琵琶法師(依代)が集められ、その痕跡が能の演目『景清』や景清神話のなかに認められた。かくして、西の都、京都の周縁、大津の琵琶法師である蝉丸と対比される東の琵琶法師、景清の面影が顕在化されることになった。景清は「もうひとつの鎌倉」の体现者だったのである(そしてこの景清のものとしての琵琶法師の伝統が形骸化を免れ今に息づいている例を桑田桂祐の歌詞を分析する過程で理解された)。

(3)今後の展望:本研究を通して、最終的に自己と非自己を区分する文化免疫作用=文化の深層記憶が「地霊(ゲニウス・ロキ)」に宿り、それが特殊なしるしを帯びて顕在化されることがある程度検証された。そこで今後の研究の課題は、この成果を前回の科研費の成果と合体させることで、さらに独自の新しい文化理論を構築することである。幸い、本年度で完了する研究に続き、新たに「免疫の詩学の構築 聖パトリックの煉獄巡礼をモデルに」という研究課題名で、科研(基盤研究C)を申請し、採択された。その概要は以下の通りである。身体における自己の主体は脳ではなく、臓器機能の役を免れ、身体の周縁を巡る漂白の細胞免疫(インミュニティ)に宿る。ここに身体における縁と無縁の逆説の関係がある。本研究は、この免疫学の命題を詩学に導入し、文化の主体のありかを、コミュニティ内部から排除され、周縁に置かれた「インミュニティ(免疫)=アジュール」にあると措定することで、マクロ・中央集権・リアリズムの世界観を、ミクロ・周縁・虚構=無視・排除されたものの方から逆説・異化し、新しい詩学(文化・文学)の理論を構築する。対象とする地域はオクシデント/日が沈む地の表象を負うヨーロッパの極西・アイルランドの周縁、ヨーロッパ独自の死生観、煉獄の概念が誕生・形成された世界唯一の煉獄巡礼の地、ドニゴール・ダーグ湖の小島=聖パトリックの煉獄である。以上が、今後の展望である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

- 1 木原誠、イエイツと神秘主義 穿たれた沈黙/「仮面」の秘儀、佐賀大学文化教育学部論文集第18集第1号、査読無、2013、pp.105-114.
- 2 木原誠、『ハムレット』と中世都市伝説 煉獄は存在するのか否か、それが問題である、佐賀大学文化教育学部論文集第19集第1号、査読無、2014、pp.119-136.
- 3 木原誠、W. B. イエイツにおける「仮面」と老い、佐賀大学文化教育学部論文集第19集第1号、査読無、2014、pp.137-151.
- 4 木原誠、免疫の詩学 序論 まなざしか、おもざしか、佐賀大学文化教育学部論文集第19集第2号、査読無、2015、pp.197-234.

〔学会発表〕(計2件)

- 1 木原誠、「仮面」と老い(シンポジウム表題:イエイツと老い)、日本イエイツ協会第49回大会、2013年10月19日、広島市立大学
- 2 木原誠、めぐり逢う幽霊たち 近代英文学と口承の伝統(シンポジウム*木原は企画者・司会者・発表者)、日本英文学会九州支部第66回大会、2013年10月26日、鹿児島国際大学

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木原 誠 (KIHARA MAKOTO)

佐賀大学・文化教育学部・教授

研究者番号：00295031

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：